



Title	ドウレとハイアット：ロサンゼルスにおけるイラン出身者の集団形成に関する考察
Author(s)	椿原, 敦子
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 149-164
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5877">https://doi.org/10.18910/5877</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ドウレとヘイアット—ロサンゼルスにおけるイラン出身者の集団形成に関する考察

椿原 敦子

### 〈要旨〉

本稿は、コミュニティ／アソシエーション、ゲマインシャフト／ゲゼルシャフト、有機的連帶／機械的連帶といった、機能や属性に基づく集団分類の議論を脱して、日常的な人々の相互行為が可視的な集合行為を形成する過程を考察するものである。このため、ドウレとヘイアットという2つの社交形態に着目し、ロサンゼルスのイラン出身者が集団を形成する際に両者がどのような役割を果たしたかを明らかにする。

イランにおけるドウレやヘイアットは、テヘランを始めとする都市での急激な人口増加の中で、人々が関係を維持するための新しい術であった。ロサンゼルスという広大な都市空間の中では、既存の社交形態による紐帯の維持である。それは「イラン人のコミュニティ」という集団全体を想像することなしに、人々が親族や同僚、友人などの関係を個別に維持することで成り立っているネットワーク状の集団であるといえる。

ロサンゼルスのイラン出身者の間では政治的・宗教的多様性を理由に、

討議によって目的や行為を規定した集団を形成することが困難だった。しかし、近年になって出現したNPOのように制度化された組織のいくつかも、ドウレやヘイアットのような集会から発展したものである。自分たちがいかなる集団であるかを予め規定することなしに行われてきたという、個人的な集会の特性が、制度化された組織の形成を容易にしたのである。

### キーワード

イラン ロサンゼルス 移民 集団形成 社交

## 序

マサチューセッツ工科大学（MIT）の調査では2003年の在米iran人の人口は60万人に上るとの記載もられ、そのうちの約半数がロサンゼルス市（以下LAと記す）をはじめとする南カリフォルニアに居住している<sup>(1)</sup>。LAのiran人の商業、居住地域はある程度のまとまりを持つが明確な境界をもたず、コリアタウンやチャイナタウン、リトルトーキョーやリトルエチオピアのような地名としても存在しない。また、iran人の相互扶助組織は極めて少ないといわれる（Kelley 1993a; Mostofi 2003）<sup>o</sup>。Mostofi (*ibid*) はアメリカのiran人は西洋の基準を熟知して、公の場ではアメリカの市民社会のやり方を受け入れながらも、家庭と家族や友達といった私的領域ではiran人アイデンティティを構築することに成功していると述べている。Naficy はLAのiran人の網の目状のつながりが「物理的な単一のゲットー enclave に固まって暮らすことなしにコロニーを繁栄させた」と述べ（Naficy 1993: 193）<sup>o</sup>。Mostofi と Naficy の主張に共通しているのは、LAにおけるiran人のつながりは組織や制度によるものではなく、ばらばらの個人による網の目状のネットワークによって維持されているという点である。

これまで社会科学の領域では、様々な人間集団の類型化が試みられてきた。マッキーバーのコミュニティ／アソシエーション、テンニエスのゲマインシャフト／ゲゼルシャフト、デュルケームの有機

的連帯／機械的連帯といった集団の区分は、人間が自然で本源的な感情に基づく集団と、利益を追求するための集団という二種類の集団を形成するという考え方に基づいている。家族から市民社会、ネイショナル、エスニシティといったあらゆる集団が、このいずれに相当するのかという議論がなされてきた。しかし、それは近代西洋の、機能的な側面に着目した二元論的な類型化に過ぎないと批判もある（高田 1998; 小田 2004; 真島 2006）。重要なのはむしろ、人々が集団をどのように想像し、それに基づいて行動しているのかを明らかにすることであると考えられる。メルツチは社会運動に関する論考の中で、いかなる集合行為も整合的な実体ではないことを指摘し、主体が集合行為を構築する過程や、集合行為への主体の関与・離脱、様々な要素が整合性を生み出す過程こそ解明すべきであると主張する。メルツチの主張は二元論的な分類に従えばゲゼルシャフト的集団について述べているように見えるが、そうではない。何が自然な結びつきに基づくもので、何が目標や利益を追求するものであるかという観点を脱して、日常的に反復される相互行為と可視的な集合行為がどう関わっているかを明らかにすることが重要であるとメルツチは考える（メルツチ 1997）。

ラトゥールは、相互作用が一時的で無力なものとして終わらず、永続的で時間的・空間的な拡がりを持つには、どうやって、どのような手段で実践されているのか、「顔の見える関係、裸の、未装備の、動的な相互作用のうち、どうしてあるものだけが遠くまで及んで永続的であるのかを説明できるような特定の力」＝永続性

durability を解明することが重要であると述べてゐる (Latour 2005: 64)。人々の日常的な集まりが繰り返される過程である決まつたペ

ターンが作られ、社交の形態が確立される」とは、動的な相互作用が永続性を獲得する一つの過程である。山崎 (2003) によれば社交とは、以下のような特徴を持つとされる。第一に、社交の場では客と主人、相客同士といった役割を、暗黙のうちに了解して行動する」とが求められる。それは「場所柄を心得て行動する」ということであり、物語の筋を理解してその進行にふさわしくふるまう」ということである。第二に、社交は、人々が「無意識に感情を共有している状態」でも、功利的な組織のように「構成員が意識的に団結を確認しつづけているような関係」でもなく、その中間の状態にある。イランにおけるドウレ *dowreh* やハイアット *hei'at* は、そのような

社交の一形態である。以下ではイランにおけるドウレとハイアットについて考察し、それぞれがどのような特徴を持っているかを明らかにする。また、2つの社交の形態がLAにおいてどのように用いられ、変化していくかを検討する。

## 1. イランにおけるドウレとハイアット

### 1-1. ドウレ

ドウレ *dowreh* は、場所をローテーションして集まる定期的な集会である<sup>(2)</sup>。起源は定かではないが、過去何世紀にも渡って存在したとされる (Bayne 1968)。ドウレが普及したのは20世紀初頭に25年にわたって活動した、11人のメンバーによる「理念型の」ドウレによる (Zonis 1971)<sup>(3)</sup>。先行研究では活動内容の如何に閑らず、ドウレはイランの政治に影響を及ぼすインフォーマルな集団としてイランの政治機構の中に位置づけられて説明されることが多い。しかし、必ずしも政治的な意図をもつて結成されたものではなく、すべてのドウレが政治的な影響力を持つものでもない。政治的影響力

もとされる。ドウレとハイアットはイランにおける「インフォーマルな組織」の代表的な例として挙げられるものである (Binder 1962; Miller 1969; Spooner 1971; Zonis 1971; Thaiss 1971; Bill 1972; Fischer 1983)。先行研究において議論されているように、ドウレとハイアットがイランの政治に果たした役割を考えれば、確かにフォーマルな政治機構に対してのインフォーマルな組織であると言つうことができる。しかし、ドウレやハイアットはバーナードの述べたようなフォーマル組織の副産物ではなく、またドウレやハイアット自身がフォーマルな組織へと発展するとはなかつた。以下ではドウレとハイアットがどのような特徴を持つかを明らかにする。なお、本節で扱う事例はイラン革命前のもので、革命後の状況については言及しないものとする。

バーナード (1968) によればインフォーマルな組織とは、共通の目的を持たない、個人的な接触や相互作用の総体と定義される。インフォーマルな組織はフォーマルな組織を創出し、フォーマルな組織はインフォーマルな組織を生み出すというように相互補完的であ

は個々のドウレが持っていたものというよりは、ドウレを結節点とする人々の重層的なネットワークの産物である。ドウレは一般的に以下のような特徴を持つ。多くの場合はグループ名を持たず、メンバーは数名から十数名程度で固定され、メンバーの家を順に回って

週1回程度の頻度で集会を開く。メンバーが司会や発表者などの役割を順に担当する。集会の目的は詩、音楽、文学、政治、宗教からギャンブルまで多岐に渡る<sup>(4)</sup>。しかし、多くのドウレはメンバーの興味関心に沿って行われ、活動内容は複合的である。たとえば、

メンバーの家に集まり食事をして、政治やビジネスについての談話

を交わし、バックギャモンに興じたり、詩を朗誦したりする、といったようだ。

また、専門家のドウレや家族のドウレ、同窓生のドウレ、同郷者のドウレのように、加入者の属性に基づくドウレもある。他の特徴として、以下の2つが挙げられる。第一に、ドウレの参加者は、大抵は複数のドウレに所属している。たとえば、政治のドウレに属していると同時に社会的、文化的、娯楽、知的目的でのドウレにも参加しているという具合に。第二に、ドウレへの加入は家族や親族や友人、知人の紹介を契機とするため、メンバーは異なる職業や社会階層から構成されることが多い<sup>(5)</sup>。(Binder 1962; Zonis 1971; Sreberny-Mohammadi and Mohammadi 1994)。

Bill (1972) は、1970年代の都市部に住むイラン人曰、「ドウレにひとのも属していない者はいくわざかである」と述べており、ドウレは広汎に浸透した社交の形態であったことが伺える。実在のシーア派聖職者のライフヒストリーを基にした物語 *The Mantle of Prophet* では、神学校出身の主人公アリーが70年代中葉に、生まれ育ったシーア派の聖地コムから首都テヘランへと移住した時の様子を以下のように描いている。

…テヘランはドウレであふれていた。男女それぞれのサークルが、部分的には仲間と楽しみを分かち合うために、部分的にはメンバーそれぞれが興味を持っていることを紹介するためには、毎週集まる。ドウレのメンバーは知的・情緒的な共感に基いて集まっている。ドウレは時に、極端に知的（現代ペルシア語詩、イスラーム哲学など）、あるいは過剰に社交的（地方都市から出てきたメンバーが方言のジョークを言い合ったりする）だった。ギャンブルのドウレは悪名高い。殆どのドウレの関心事は大体この中間に収まっている。ドウレと呼ばれるか否かに関らず議論を行う集団は、地元のモッラーが率いるスラムの住民に至るまで、テヘラン社会に広く存在している。…アリーはテヘランに着いて数週間で2つのドウレのメンバーになった。(Mottahedeh 1985: 271-272)

多くの先行研究では、ドウレは専ら都市のものであるとされ、主として都市のミドル・アッパークラスのドウレが政治に果たしたインフォーマルな役割が取り上げられているが、Beeman (1986) は、農村でもドウレが存在し、同様にインフォーマルな政治的役割を果たしたことを明らかにしている。彼の調査したGavaki村の事例では、地元の有力者や教員などがメンバーとなり、ドウレを形成してインフォーマルに決め事を行っていた。ドウレの参加者は大地主や

富豪などではなく、選挙で選ばれる（公的な）代表者ではない。彼らは毎週金曜に集まって作物の販売や家畜の世話を共同で行い、メンバーの間で資金の貸し借りや労働力の供給を行う。同時に学校や村に関する意思決定を、これらの事柄を行う人がグループの外に存在したにもかかわらず、インフォーマルに行っていた。(Beeman 1986: 46-47)°

イランにおけるドウレと、アソシエーション *anjomān* は相対する性格を持つものである。アソシエーションは、Binder (1962) が協同集団と呼んだ、政府が法的に規定した集団 *regulated group* に準ずるもので、医者、歯医者や法律家、エンジニアの職業アソシエーション、商業組合など、「伝統や法に則って固定された機能と、権利・義務を持つ」組織である。しかし、Bill (1972: 44) は、これらのフォーマルな集まりでは「人々は互いに本当に信用せず、不要な批判をしたりスケジュールや規則や手続きを勝手に曲げようとする」とし、「組織内の分裂や非難の応酬、機能不全や個人主義がつきもので、それは組織的カオスである」と述べている。イランでは人々の組織への信頼は低く、組織的な協同に対する不信感が行動の根底にあり、組織の目標や利益のために協同する」とがなく、「個人主義 individualism」が浸透しているとしばしば指摘される (Binder 1962; Zonis 1971; Bill 1972)°。では、不信感と機能不全にも関わらず、アソシエーション的な組織は何故存続しているのか。Bill は政党の構造に言及して「イランの政治は集団の中で各々が関係のある役割を果たすものではない。政党は、著名な政治活動家

(達) のまわりに便宜を求めて人が集まつたもであり、政治プロジェクトとしては何の役割も果たさない」という。個人による利害追求の行動はパールティーバーズィー *partibazi* と呼ばれる。パルティーバーズィーを Binder はロビー活動と定義したが、イランのパールティーバーズィーは、ロビー活動のように集団の利害を追求するものではなく、義務（義理）で鎖状につながった一連の集団という意味であり、個人の利害を追求するものであると Beeman は述べてこく (1986: 48) (e)°。

アソシエーション的な組織が個人的な利害の追求と競合の場であるのに対し、ドウレ内部の人間関係は、平等が保たれるよう努められる (Zonis 1971:240)。ドウレの場での役割—その日の発表者、司会者、場所や料理を提供する者—は、日常生活における外的構造から隔離された、一時的なものである。Beemanによれば、イランにおける社交の場での親密な関係には、*dūstan* と *saminiyat* という2つの形態がある (Beeman 1986: 39-45)°。dustan 関係は非同一、不平等な関係で、二者がモノや利益を与える立場と受け取る立場という役割を引き受ける。この振舞いを周囲のものが支持することで集団内のヒエラルキーが構築される。*l* の不平等な関係はモノや利益の要求だけではなく、タアッロフ *ta'arof* といわれる定式化された挨拶によっても明らかにされる。タアッロフには他者を持ち上げる尊敬のタアッロフト、自分を卑下する謙譲のタアッロフがある。様式化されたタアッロフによって、例えば店主と客のように、互いを平等な立場であると考える個人が、平等を保ちながら不平等な立場を

表すことが可能になる (Beeman 1986: 141, 151)。dustan 関係が互酬的な役割を演じるにによるてもたらわれぬ不平等な親密さであるのに対し、ドウレにおける親密さは非互酬的で平等な samimiyat 関係である。ドウレは政治や学問に関する議論や音楽、ギャンブルそれ自体が目的ではなく、平等な親密さを保つことが第一義とされる。それゆえ何を行っているドウレであるかよりは、誰がいるドウレであるかがより重要になる。

### 1・2. ヘイアット

ドウレと比較すると、宗教的集会を行うヘイアット *hei'at*<sup>(\*)</sup> は、活動の内容や集団内での役割は決められており、内容や役割はある程度どのヘイアットにも共通する。ヘイアットがモスクでの宗教実践と異なるのは、ドウレと同様、既に築かれた人間関係を基に個人の家で催される集会だという点である。かつてのイラン社会では、少人数の友人同士による宗教的な目的を主眼としない集会においても、集まりの最初と最後はある種の宗教的な説教が行われていたとされる (Mottahedeh 1985: 347)。ヘイアットは大別してバーザール商人やギルドなどの職業のヘイアット *hei'at-e senfi* と、地縁によつて結成されるヘイアット *hei'at-e mahalleh* (地区のヘイアット) に分けられる。いずれも 30~50 人規模の集団で、大抵は *hei'at-e husaini* (ホセイニーのヘイアット)、*hei'at-e karbalā* (カルバラのヘイアット) などグルーピングとに名前を持っている。集会は主として個人の家庭で定期的に開かれる。商人やギルドは伝統的に制度化

されたアソシエーションを持っており、ヘイアットはギルドのフォーマルな組織として結成されているものではない (Thaiss 1971)<sup>(\*\*)○</sup>

集会は、定期的に催される場合は場所と時間が決まっている。不定期に開催される場合は曜日を決めて、週ごとにメンバーの家から家へと順にまわって行われる。この場合メンバーは年に一回は自分の家で開催するように年間予定で割り当てられるため、参加者は年の初めに決定される。メンバーの一人が代表となり、日時の選定や司会を決定し、アナウンスをする。また、いつもヘイアットに参加する人々が印刷費を出して、日時と場所を書いたサークルを発行する。集会は一般的に、週末にあたる木曜の夜に行われることが多い。

集会は日没後から 3~4 時間の時間をかけて行われる。宗教的な清め *urzu'* を行い、礼拝の先導者 *pishnamaz* に従つて礼拝が始まること。実際には 7 時ごろから礼拝が始まられる。説教師 *valez* が 30 分から 1 時間程度説教を行う<sup>(\*)○</sup>。大抵は預言者ムハンマドとその子孫についての故事を引き合いに出して教訓が語られる。預言者の名前が出る毎に、聴衆はサラーヴマー *salavat* (神と預言者一門への祝福の頌詞 "allāhumma ṣalli 'alā muhammad wa āl muhammad") を唱える。時には説教師自身が話を中断してつかの間の休憩を取るために、あるいは聴衆の集団意識を引き出すことを意図してサラーヴァトを呼びかけることがある。続いてカルバラのホセインの殉教詩 *rowzeh* が語り手であるロウゼハーン *rowzehkhān* によって朗誦され、10~15 分程全員が立ち上がりリズムに合わせて胸を叩

くスィーネ・ザダンを行<sup>10</sup>う。説教師がロウゼハーンを兼ねる」ともある。宗教儀礼の後には、ビジネスや個人、社会に関する議論や、その他の「非宗教的な」事柄についての議論を進める。たとえば、メンバーの一人が資金面で困難な状況にあり、援助を必要とするというアナウンスなど。あるいは、学校やモスク建設のための資金を集め相談。縁組話もやり取りされる (Thaiss 1971: 353- 354)。

職業のヘイアットに対し、地区のヘイアットはテヘランに移住した都市下層民によって隆盛となつた。1963年の白色革命に伴う土地改革を契機に、農村や地方都市からテヘランへの移住者が急増した<sup>11</sup>。工場やバーザールの労働者、行商などに従事していたこれらの人々は、バーザールのヘイアットや知識人のドウレのいずれにも入ることはできなかつた。彼らはドウレやヘイアットに似たグループとして、居住地区や出身地に基いて自分たち自身のヘイアットを作つた。地区的ヘイアットは職業のヘイアットとは異なり、地域に基づいた集団である。同郷者はしばしば移住先でも隣り合わせに住むことがあつた。近隣のヘイアットは職業のヘイアットと共に通する特徴を持っていたが、職業のヘイアットとは異なり、集団の中で経済的に成功した人がリーダーとなり、きわめて宗教的だった。聖職者の本来の活動ではなかつたが、典型的な地区的ヘイアットには必ず聖職者がゲストとして迎え入れられた。メンバーがコーランの章句をアラビア語で順に読んで、聖職者がその発音を正す。あるいはメンバーが文盲の場合は、聖職者がコーランをアラビア語で読む。そして礼拝を行い、聖職者が質問の機会を設ける。質問は大抵の場

合、何が清浄で何が清浄でないか (*halāl* と *halām*) を問うもので、たとえばペプシコーラやテレビはどうか、といったものまで含まれる。それからロウゼが始まる。ロウゼハーンは一晩に2-3の集会を回ることもある (Mottahedeh 1985: 350)。職業のヘイアットも地区のヘイアットも、聖職者やロウゼニーといった宗教的エージェントに媒介され、宗教儀礼に共通の実践が行われる。いずれのヘイアットでも集会の進行はある程度共通で、礼拝を先導する者、説教を行う者、説教師などの役割が決まっている。

ホイジングは『ホモ・ルーデンス』において、眞面目な仕事―学問、戦争、裁判、芸術、宗教儀礼―が支配するようになった19世紀以降、遊びは周縁化され、日常生活の外に置かれて、空間と時間を限って行われることになったと指摘する (ホイジング 1973)。遊びの周縁化を批判したホイジングの議論は、それ自体が遊びと眞面目を明確に区別できるものであると考えている点で、近代の概念をそのまま踏襲しているという問題を持っている (山崎 2003)。ベイツソンは遊びの成立は「これは遊びだ」というメタ・メッセージの交換の成否にかかっていると述べている (ベイツソン 2000)。遊びに限らずメタ・メッセージの交換は、ホイジングのいうように、空間・時間的に限られた場所において容易になると考えられる。ドウレやヘイアットは、集会の中に眞面目さと遊び、学問や儀礼、娯楽、親睦が混在している。集会の外の世界における不平等な関係を意識的に平等なものとし、アカデミズムの場における学問的な営みやモスクでの宗教実践を家庭に持ち込む。それは「日曜大工や菜園、

狩猟、家事労働が遊びになり、ゲームやスポーツが職業化する」とある」ように、「功利的な行動、日常生活の行動を意識の上で転倒させ、目的追求のふりをしながら、実はその過程に集中する行動」であるといえる（山崎 2003: 73）。

## 2. ロサンゼルスにおける集団形成

イラン人のアメリカへの移住は2つの波に分けられる。第一波は1950年代から1977年までの間で、留学生を中心とする一時的な滞在者が中心である。第二波は1977年から1986年にかけてのイラン革命前後の時代である。1975年当時はロサンゼルス、サンフランシスコ、ニューヨーク、ワシントンDCの4都市のイラン人居住者数に大きな差は無かったが、入国者が増大するにつれて顕著な人口差が見られるようになった（Sahagh and Bozorgmehr 1988: 77）。LAへの移住の動機としては、他州で大学を卒業後に移住するケースや、家族の呼び寄せなどが多い（Modarres 1998: 47）<sup>(2)</sup>。LAのイラン人の人口は70年代後半から80年代前半には急激な増加がみられる。しかし、イラン系のビジネス・政治・生活扶助などの組織は90年代に至るまでは多くなかった。一方、ドウレをはじめとする、小規模なイラン人同士の集まりは盛んに行われていた。以下ではLAにおける社交形態の変遷を辿り、フォーマルな組織との関係を明らかにする。

### 2.1. LAにおける「ドウレ」

LAのペルシア語メディアと「亡命者」文化について論じたNaficy (1993)は、ドウレにサロンという訳語を充てている。ドウレは賑わしさ、暖かい雰囲気、食事と飲み物、詩の朗読、音楽を楽しむものであるとし、「脳と身体の滋養」であると述べている（Naficy 1993: 50）。彼は1980年代中頃に自分自身が参加したLAでのドウレについて記している。イラン出身のUCLAの教員と学生を中心としたそのドウレは、大抵10人ほどが集まり、月に一回それぞれの家で夕食を食べて議論をした。「私は長い夕方の集会を毎回楽しみにしていた。…握手、抱擁、キスーあるいは頬を合わせての挨拶が続く。甘い紅茶やコーヒーを手にしての会話。その日の発表者が発表を始める。話題は—大抵はイランの時事のことや歴史、文化、芸術に関連していた—発表者によって決められ、事前に告知されている。時には集会全体会が詩の朗誦会であったり、自作の詩が披露される。司会者の紹介の後には、雑談が止み、人々は静かに耳を傾け、ノートを取る人もいる。発表に続いて質疑応答が行われる。その後には更に議論—時にはゴシップ—そして次回の開催日時と発表者が決められる。…私たちのドウレは次第に変化していった。まさに多様性それ自体が不和を招いた。…学生と専門家の所得格差がドウレを簡素化させた—私たち学生は休憩用に、お茶やコーヒーとクッキーしか用意できなかつた。祖国での政治情勢の進行に対し、周縁的な知識人という立場から私たちは殊更に反応した…発

表がアカデミックな義務のようになり、コアメンバーが卒業して他の都市や国に移り、社会的な立場が変化するにつれてドウレは衰退していく」(Naficy 1993: 31-32)。

ドウレはメンバーシップと叫う形での帰属意識を伴わない集団である。「ドウレのメンバー'zb'である」という言い方はされず、「私たちはドウレを持って darim いる」というように通常、一人称複数形で表現される。あるいは一人称単数で「私はドウレを開く mizāram (migozāram)」と言われる。メンバーであるという言い方がされないのは、ドウレが既に友人や家族、親戚としての関係を持つ人々が親睦を深めるために作られるからである。ドウレが通常の友人や家族の往来と異なる点は、第一に定期的に開かれるものであるという点、第二に順に互いの家を回り、自分の番noubat がある点、第三にドウレが作られたときの人々の関係を強化する目的で作られるため、参加者の増減は基本的ではないという点である。以下では2つの事例を挙げて考察する。

#### (1) Sさん(50代女性)のドウレ

フラワーアレンジメントの講師をしているSさんは留学生として1978年にアメリカに来て、テキサス州に1992年まで住んでいた。彼女が学生仲間と作ったドウレは1980年代初頭から彼女がLAに移住するまで続いた。彼女はドウレについて次のように述べている「ドウレには男女あわせて20-25人が集まっていた。殆どが既に顔見知りだったが、何人かはドウレで初めて知った人もいる。1979年のイラン革命の後

だったので、ドウレではイランの政治について盛んに議論を交わしていた。私は親モサッデグ<sup>(13)</sup>でマルクス主義だった。他の参加者はマオイストやスターリニスト、ソヴィエト共産主義者、親シャーなどのいろんな立場の人があった。私たちは本気で議論して喧嘩も沢山した。それぞれの政治的立場で使っている用語も違っていた。当時は革命直後でイランに希望を持っているた。だからこそ議論をしていた。私たちは多くの時間とお金をドウレに費やした。料理やもてなしという意味ではない。組織に資金を送ったりしていた。時間が経つにつれてだんだん望みがなくなり、そして私たちは家庭や仕事など自分のことに忙しくなっていった。

#### (2) Pさん(50代女性)のドウレ

子供向けペルシア語教室とシニア向けの生活相談の2つの活動を行っているPさんは現在2つのドウレを持っている。一つは1990年代後半から現在に至るまで10年ほど続いており、女性10人で毎月一回、第一月曜に集まっている。皆仕事があるので毎回夕方の6時から9時に集まり、夕食を食べる。彼女を含め皆、既婚者だが、家族は同伴しない。かつてLA市内にあったイラン人のための生活相談センターで活動していたのがこのドウレを作るきっかけとなつた。センターがなくなつた後もそこでできた友人とは付き合いが続き、ドウレを作つて定期的に会うことに決めた。何人かはドウレを去つていったが、呼びかけた当初の友人だけで、新しい人は入れないように決めて

あつた。センターで知り合う前から友人だったのは一人だけだ。遠方の友人も参加している。アーバインの友人はドウレでLA市内に来る機会を利用して、他の人にも会うので遅れて参加する。ドウレの会話は仕事のこととか、助けが必要なことを話すこともある。ドウレの進行に決まりを設けているわけではなく、おしゃべりをしたり、ゲームをしたりする。ドウレは家で開くこともある。ドウレの進行に決まりを設けているわけではなく、おしゃべりをしたり、ゲームをしたりする。ドウレは家で開くこともある。ドウレの進行に決まりを設けているわけではなく、おしゃべりをしたり、ゲームをしたりする。Pさんはあまりそれを頻繁にやるのはみつともないとされる。

もう一つはイトコのドウレである。Pさんはイトコ (*dokhtar khale, pesar khale*; 母方オバの子供たち) の4家族とドウレを持っている。彼女の他の親戚や家族はLA近郊にはいない。アーバインなど遠方からも来る。イトコたちとは以前から交流はあるが、そんなに多く会うことはなかったので、ドウレを作ろうと2年前に彼女が申し出た。ドウレは月に一回、日曜に行っている。休日なので、午後から昼食を取り、夕食を食べ、長い時間と一緒に過ごす。

上記の2人の事例のように長年にわたってドウレが続くことは少なく、ドウレをかつて持っていたが、長くは続かなかつたと述べる人は多い。その理由の一つとして、定期的に自分の家に人を招いて、

もてなしをすることが負担になつたことが挙げられる。50代のエジニアの男性Aさんは、7人の友人とドウレを2年にわたりて持っていた。「かつては友人と週に一回集まってカードゲームをしていました。でも、ここLAでは個人の家に集まるよりレストランに行くことが多い。自分の家に招くときには張り切って料理を作ったり準備をしなくちゃならない。結婚して妻がいる人ならいいけど、そうでない私のような人には大変だからね。今は仕事で忙しくて、そんな娯楽のために時間を使つていられない。他の友人も忙しくなつてドウレは続かなかつた」。ドウレでは自分の家に招く番になると、それまでに受けたのと同等のもてなしを提供することが期待される。このような互酬的な義務がドウレの維持を困難にすることがあるため、事例2のように時にはレストランで開く、十分な間隔をあけて集まるといった工夫が加えられてきたのがLAにおけるドウレの特徴である。イランのドウレと比較した際のもう一つの特徴として、ドウレを持つ人と持たない人の二極分化が進み、女性がドウレの主な担い手となつたという点である。事例1、2は共に女性のドウレの経験であるが、2人は共に、現在最もドウレを多く持つているのは仕事を持たない女性だと指摘する。時間に余裕のある人が多くのドウレを維持することができるというのが両者の意見の一一致するところである。

以上のように、LAにおけるドウレも基本的な形式は継承されたが、いくつかの変化が見られるようになつた。第一に、個人の家庭で行われていたドウレが、レストランでも催されるようになつた。

例えば上記の事例に見られるように、家庭とレストランの両方で開くという新しい形式が生まれた。第一に、ドウレを持つ人と持たない人の二極分化が進み、家庭を持つ女性がドウレの主な担い手となった。それに伴いドウレの内容も政治や文学と言った特定の目的を持たないものが主流となつていった。

## 2・2. 組織への発展

前述の通りドウレは既に関係を築いている人の親睦であり、参加者の増減は基本的ではない。しかし、LAでのドウレやその他の個人的な集会のいくつかは、不特定多数の人間に開かれた集会へと変化した。Naficyは、レストランで開かれるドウレでは、食事と担当者による発表、討議という形式は維持されたが、メンバーを限定せず、レストランを訪れた客が参加するようになったと記している(Naficy 1993: 50-54)。宗教的な目的で集会を開き、組織へと発展した例としては、IMANが挙げられる<sup>(14)</sup>。1990年、現在の会長である歯科医のN氏が自宅にて、2名の友人と共に木曜夜に祈祷ドアーエ・コメイル *do'a-yé komeil*<sup>(15)</sup> を始めた。N氏のクリニックを患者として訪れた人々が、遠方からも氏の自宅に集まるようになった。ドアーエ・コメイルは願掛けの祈祷であり、人々は病気の快癒や子供の試験合格などを願って訪れる。8年間ほどは自宅にて集会を行っていたが、参加者が増えて収容しきれなくなつたため、会場を借り、後に寄付金を募つて、1995年にLA西部に現在の施設を設立した。現在IMANはNPO(501(c)

(3)・宗教・教育・文化組織)として活動している。全ての催しは会員・非会員を問わず参加可能で、祭事には数百人から二千人ほどの人が集まる。会長のN氏の他、8名のメンバーからなる理事会が設けられている。

木曜夜のドアーについて、開始当初からのメンバーの一人は、イランでは週末にあたる木曜夜に個人の家でハイアットとして集会を開く習慣があり、それに従つたものだと説明する。前出のPさんは父親がイランで開いていた宗教的なドウレについて次のように述べている。「父は毎月17日に友人や親戚を集めて集会を開いていた。毎月17日だということは皆知っているので、皆が集まつてくる。聖職者を家に招いて、ドアーエ・コメイルを行い、昼食や夕食を出していた。他の人も毎月何日、と決めて同じような集まりを行っていたので、私も父と共に参加した。ハイアットは宗教熱心な男性が中心の集まりだが、ドウレには家族ぐるみで集まり、男女が別々の部屋で過ごしていた。このようなく、最初から組織化を意図したのではない集会では、会場や食事を提供するホストと参加するゲストの役割が分かれしており、集会の進行を決定するのはホストの側である。集会がフォーマルな組織としての体制を整え、意思決定を行う理事会などの中枢機関と、組織を支持して参加するメンバーという役割が生じたとき、ホスト・ゲスト関係が理事会・メンバー関係へと転化することで組織化が容易になつたと考えられる。

LAでのイラン人によるフォーマルな組織の形成を困難にする要因として、個人主義や政治的・宗教的立場の多様性が挙げられる。

ある男性は、イランにおける組織と同様、LAでも組織的な合意の形成には困難が伴うことを次のように指摘する。「イラン人はグループで同じ目的のために一緒に何かをすることがない。グループで誰かがリーダーシップをとって、それに皆が従って協力する」ということがない。イラン人の多くは自分のことだけを考える。人の意見を聞こうとしないので「それは間違いだ 私が正しい」の一点張りになってしまう。個人主義 *yekta-gari* がまかり通っているのだ」(Rさん、40代男性)。Kelley (1993b: 86) は、政治的な意見の相違がイラン人ムスリム組織の設立を困難にしてきたことを、以下のように述べている。「イラン人ムスリムのコミュニティは、宗教・文化センターとして、特にホメイニーを支持するのではないモスクを作ろうと計画してきた。しかし資金的な支援者は、アメリカの公衆がLAにイラン人のためのイラン人によるモスクを建設することに否定的な反応が起こるのを懸念してしばしば撤退することがあった。加えて地元コミュニティの強烈なホメイニー批判者達は、そのような計画はイスラーム共和国支持者を必然的に喜ばせることになるだろうと考えた。信徒間の政治的な衝突が潜在的なスポンサーを慎重にさせ、今に至っている」。

ゴフマンは、ある局域における行為を規定するものとして、道徳的要請と道具的要請という2種類の要請があると述べている。前者は行為者にとって自明の行為規定であり、禁止や奨励に意識的に従うようなものではない。後者は局域において規定に従うことが義務とされる、明示されたルールである (ゴフマン 1974: 125)° ドウレ

やハイアットのような、既に築かれた人間関係を基盤とする集会の中での行為規定は道徳的要請であり、組織を作る際に設けられる会則などの規定は道具的要請である。IMANでは、参加者の間で宗教実践に関するいくつかの見解—例えば服装や音楽に関する見解—に相違がありながらも、それを留保する形で実践が行われている。

会長のN氏はIMANのこのよう規定を行っていないことについて、新聞のインタビューに答えて「我々は厳密な服装規定は設けていない。人々を排除する方向に向かうのではなく、魅力を感じてもらうように努めている」と述べている (In Focus June 2005: 13)° 服装に関する規定は組織として設けられていなくても、人々の行為は道徳的要請によって規定される。ドアーアイエ・コメイルや金曜礼拜に訪れる殆どの女性はベールで髪を隠し、肌を露出しない服を着ている。頭から足までを覆うチャードルを被る女性もいれば、髪を覆わず、スリット姿の女性もある。ある時、若い女性がノースリーブで髪を覆わずに礼拝所に入った。それを見て他の女性が彼女を指差しながら、隣の女性と声をひそめて話をする。しかし、このような服装に関する暗黙の了解は、IMANの他の活動——たとえばIMANにはペルシア語・英語での講演会や子供向けのペルシア語教室、第二世代向けのコーラン教室（英語）などがある——に及ぶものではない。個人的な集会から発展した組織は、自分たちをいかなる集団であるかをあらかじめ規定することなしに活動することで、見解の一貫しない道具的要請についての議論を行うことなしに集団を形成することができたと考えられる。

## 結

以上に見てきたように、イランでは制度化されたフォーマルな集団としてのアソシエーション *anjoman* とインフォーマルな集団としてのドウレやヘイアットは異なる性質を持つ。前者が個人の利害追求と競合の場であるのに対し、後者は平等な親密さを保つための場である。LA でもドウレやヘイアットに準ずる集会は行われてきた

が、家庭で催されること、友人や親戚など既に関係を持っている人々の集まりであるという点は必ずしも踏襲されなかった。このため、レストランなどの場で開かれる見知らぬ人も参加可能な集会へと変化したり、NPOとして制度化された組織へと発展する例が見られる。個人的な集会から発展した組織は、あらかじめ組織としての設立を目的とした集団とは異なり、人々が集う過程で状況に応じた行為規範や規定が形成されていった。このことが個人主義や多様性から生じる人々の不和をある程度緩和し、組織形成を容易にしたと考えられる。ハーバーマス(2000)はアソシエーションを「市民社会の制度的な核心をなす、非国家的、非経済的な結合関係」であり、その中でも重要なのは「意思形成をおこなうアソシエーション」であるとしたが、本稿で論じたのは統一された意思や合意に基づいて行動するような集団とは異なっている。またこれらの集団は、「コミュニティの中のアソシエーション」というような、副次的な集団ではない。本稿で明らかにしたのは、「イラン人のコミュニティ」とい

う集団全体を想像することなしに、人々が親族や同僚、友人などの関係を個別に維持することで成り立っているネットワーク状の集団である。気の合う仲間や親戚などとの社交と、利害追及の行動は日常生活の相互行為の中で明確に分けられるものではない。ドウレやヘイアットは、日常における断片的な人々の相互行為を定式化し、より永続的な人間関係の形成を可能にするものであるといえる。

### 注

(1) Massachusetts Institute of Technology Iranian Studies Group Research Team の調査による。(http://web.mit.edu/sg/retrieved 19/11/2005)。

(2) *dowreh* はペルシア語でサイクル、時代を意味する。

(3) 同世代の、多くは国外の学位を持つこのドウレは、「フランスの博士号を持つ」グループとして人々に知られていた。彼らの職業は議員、大臣、大使など政治に関する者と、国営石油会社や商工会議所の理事などである。理念型のドウレは、公然と政治活動を行うことが不可能な状況を背景として結成され、ドウレの普及 자체が活動の目的の一つであるとされる。表向きは政治的目的で一メンバー相互のキャリアの促進を図るという一昼食時に集会を開き、グループは宣誓やいろいろな儀式による内密の相互扶助によって結びついていた(Zonis 1972: 238)。

(4) ギャンブルのドウレは60年代からテヘラン一帯で増加し、70年代には百近いドウレがあったと Bill (1972) は記している。

(5) このような人間関係の網の目が、イランの政治や官僚制度に人々が直接・間接的にアクセスしたり、政府の管理下に置かれているマスメディアを介さずに口伝えで、迅速で正確な情報を流通させることを可能にした(Srebeny-Mohammadi and Mohammadi 1994)。

- (6) Parti は党派、党員を意味するため、字義的には Binder の「パーティ」活動に近い意味を持つ。
- (7) *hei'at* はペルシア語で(1)形状、概観 (2)団体、委員会、使節団 (3)天文学を意味する。本論で述べるような宗教的な組織だけでなく、一般的な組織や団体を指す言葉としても用いられる。
- (8) バーザールの工芸家や小規模商人のギルドは、イスラーム法に基く税の徴収、宗教儀礼の実施、リーダーをはじめとする組織内の役割が制度化されていた (Thaiss 1971: 185-187)。
- (9) 説教師は基本的に聖職者 *rowhani* (俗語では *mollah*) が務めるが、伝統的なイラン社会ではバーザール商人が聖職者の服を着て、聖職者として振舞うこともあった (Mottahedeh 1985: 347)。
- (10) シーア派イスラームの3代目イマームであるホセイン（アラビア語ではサイン）は、ヒジュラ暦61年（西暦680年）モハッラム月10日にカルバラ（現イラク）にてウマイヤ朝軍と戦い戦死した。ロウゼはカルバラでのホセインの殉教劇を指す。ホセインの殉教日を「アシュラ-'ashura」と呼び、その前日（タースワ）と共に2日間にわたって追悼の行事を行う。追悼行事には地区のハイアットでも行われていた殉教劇の朗誦や劇の上演、ホセインの苦難を体現して胸を叩きながら（*sine zadan*）、あるいは鎖で自らを打ちつけながら（*zanjir zadan*）の行進などが行われる。
- (11) 1976年のテヘランの人口はイランの全人口の13%、うち50%以上が移民だった (Mottahedeh 1985: 348)。
- (12) Bozorgmehr & Sabagh (1991) が1987年から88年にかけて LA に居住するイラン人のサンプル調査を行った結果では、移住の理由から亡命者とみなされる人は全回答者の内で40・1%いた。しかし正式な難民・亡命者の認定を受けた者は全回答者のうち約23・5%にあつたという。法的な区別は存在するが、カプランが指摘するよろど、「不本意ながらの政治難民」である難民・亡命者と「自発的な故国離

#### 参考文献

- 小田亮、2004 「共同体という概念の脱／再構築」『文化人類学』69-2: 236-246.
- カブラン、カレン、2003 『移動の時代—旅からディアスボラへ』村山淳彦訳、未來社。
- ゴフマン、アーヴィング、1974 『行為と演技—日常生活における自己呈示』高田公理、1998 『前近代ノスタルジー』の精神安定装置』『共同体の10世紀』中牧弘允 編、ドメス出版。
- 石黒毅 訳、誠信書房。
- バナード、C. I. 1968 『新訳経営者の役割』山本安次郎 訳、ダイヤモンド社。
- ハーバーマス、ユルゲン、2000 『公共性の構造転換』細谷貞雄・山田正行訳、未来社。
- ベイトソン、グレゴリー、2000 『精神の生態学 改定第1版』佐藤良明訳、新思素社。
- ホイジンガ、ヨハネ、1973 『ホモ・ルーデンス』高橋英夫 訳、中央公論新社。
- 真島一郎、2006 「中間集団論—社会的なるものの起点から回帰へ—」『文化人類学』71巻1号。
- マルチ、アルベルト、1997 『現在に生きる遊牧民・新しい公共空間の創
- 「脱者」としての移民とを厳密に区別する事はやがな (2003: 199-201)。
- (13) モハンマド・モサッデグ (Mohammad Mosaddegh, 1882-1967) は国民戦線の指導者であり、1951-1953年イラン首相として石油国有化政策を推進した。
- (14) IMAN は英語名の略称であると同時にペルシア語で信仰を意味する。
- (15) シーア派のイマーム、アリーが甥であり信徒であるコメイルに教示されたとされるドア（祈りの言葉）の一つ。

丑は臣かく』『ソルベーク 他語』印波書店。

「眞出是」2003 『社会人間－民族・文化・歴史』中央公論新社。

Bayne, E. A. 1968 *Persian Kingship in Transition*. New York: American Universities Field Staff.

Beeman, William O. 1986 *Language, Status and Power in Iran*. Indiana University Press.

Bill, James. 1972 *The Politics of Iran: Groups, Classes and Modernization*. Columbus, Ohio: Merrill.

Binder, Leonard. 1962 *Iran: Political Development in a Changing Society*. Los Angeles: University of California Press.

Bozorgmehr, Mehdi. and Sabagh, George. 1988 "High Status Immigrants: A Statistical Profile of Iranians in the United States" *Iranian Studies*, 21:5-35.

Fisherer, Michael. 1983 "Imam Khomeini: Four Levels of Understanding." In J. Esposito, ed., *Voices of Resurgent Islam*. New York: Oxford University Press. (m)

Kelley, Ron. 1993a "Wealth and Illusions of Wealth in Los Angeles Iranian Community." In Ron Kelley and Jonathan Friedlander eds., *Iranians in Los Angeles*, University of California Press.

———1993b "Ethnic and Religious Communities from Iran in Los Angeles." In Ron Kelley and Jonathan Friedlander eds., *Iranians in Los Angeles*, University of California Press.

Latour, Bruno. 2005 *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network Theory*. Oxford: Oxford University Press.

Miller, William Green. 1969 "Political Organization in Iran: From Dowreh to Political Party." *Middle East Journal* 23 (Spring/ Summer): 159-167, 343-350.

Modarres, Ali. 1998 "Settlement Patterns of Iranians in the United States"

*Iranian Studies*, 21: 31-50.

Mostofi, Nilou. 2003 "Who We Are: The Perplexity of Iranian-American Identity" *The Sociological Quarterly*, 44(4): 681-703.

Mottahedeh, Roy P. 1985 *The Mantle of Prophet*. New York: Simon & Schuster.

Naficy, Hamid. 1993 *The Making of Exile Cultures: Iranian Television in Los Angeles*. University of Minnesota Press.

Spooner, Brian. 1971 "Religion and Society Today: An Anthropological Perspective." In E. Yarshater, ed., *Iran Faces the Seventies*. Praeger Publishers: 166-188.

Sreberry-Mohammadi, Anabelle and Mohammadi, Ali. 1994 *Small Media, Big Revolution*, University of Minnesota Press, London.

Thaiss, Gustav. 1971 "Religion and Social Change: The Bazaar as a Case Study." In E. Yarshater, ed., *Iran Faces the Seventies*. Praeger Publishers: 189-216.

Zonis, Marvin. 1971 *The Political Elite of Iran*. Princeton: Princeton University Press.

## Dowreh and Hei'at: A Study of the Assemblages of Iranians in Los Angeles

TSUBAKIHARA Atsuko

This paper discusses how are Iranians in Los Angeles keeping their ties, with focusing on stylized social gatherings such as *dowreh* and *hei'at*. The definitions of social groups in social science such as community/ association, *gemeinschaft/ gesellschaft*, organic solidarity/ mechanical solidarity, are dichotomical classification with the functionalistic point of view. I argue we should explore the process how people make assemblages through the daily interaction beyond these definitions.

First, I describe the aspects of *dowreh* and *hei'at* in Iran before Iranian revolution. These gatherings enabled people in the major cities to keep their existing relationship despite the rapid population growth by immigration. Likewise, Iranians in Los Angeles use these style of socialization in geographically-dispersed metropolitan area. The people make social networks by multiple belonging to assemblage based on kinsip and friendship and so forth. They are making assemblages and social networks without imagining "Iranian community".

It was difficult for Iranians in Los Angeles to make formal organizations in a top-down way because of the diversity of political and religious standpoint among them. However, some of Iranian NPOs have originally started as personal gatherings similar to *dowreh* and *hei'at*. These organization s

didn't formulate their goal and regulation through debating in the beginning, and this pave the way for making formal organizations even though controversial issues have been remained.

**Keyword:** Iran, Los Angeles, immigrants, assemblage, socialization.